

別 紙 2

本村の学校形態（案）

項 目	義務教育学校	併設型小・中学校
校長の数	1 人 ○決定者が一人であるため、方針の決定等の判断が早い。 ●運用管理の範囲が広いことで管理職の負担が増える。	2 人（兼任可） ○小学校・中学校の管理範囲がそれぞれ分けられるため 1 校あたりの負担は増えない。 ●2 人の教育感等による指導方針のずれがあった場合、調整が必要。
⇒ 併設型小学校・中学校の形態では、校長を 1 人にし、兼務とすることも可能であり、その場合、併設型小・中学校のデメリットである方針の決定等への遅れにも対応でき、かつ校長兼務により教職員枠を増やすことができるというメリットを生むことができる。		
教職員 組 織	1 つの組織 ○職員に一体感が生まれやすい。 ●異なる教育方針等による摩擦が起こることもある。	2 つの組織 ○摩擦が生じにくい。 ●一体感が生まれにくい。
⇒ 併設型小学校・中学校の形態でも職員室を一つにすることで、組織形態を残しながら、一体感を持ち情報共有や共通意識を生むことができる。		
教員免許	小学校・中学校両方の免許所持が原則だが、現在は片方のみの経過措置 ○両方の免許を持った職員が増えれば一体的な協力体制のもと教育推進が可能。 ●両方の免許を所持している職員は多くない。	それぞれの免許を所持 ○従来どおり
⇒ 両方の免許を持っている職員が増えれば、義務教育学校において特性を出せるが、現状両方の免許を持っている職員のみで組織することは難しいことからどちらの形態でも変わらない。		
学年の区切り（カリキュラム）、独自教科、乗り入れ授業、		
⇒ 義務教育学校、併設型小学校・中学校においてもメリット・デメリットに大きな違いはない。どちらでも同じことが可能。		

教育課程	9年間を見据えた教育課程を一つ編成	9年間を見据えた教育課程を小・中に分けて編成
入学式 卒業式	1年入学時、9年卒業時に実施。節目で前期課程修了式などを独自で実施。 ○変化の少なさ ●節目を感じにくい。	従来どおりそれぞれ入学式・卒業式を実施。 ○節目や子どもの成長過程を感じやすい。
⇒ 義務教育学校については、前期課程が始まる1年の入学式及び後期課程修了時に卒業式があるのみで、保護者の理解や馴染むまでに時間がかかることが予想されるため、従来どおり入学式・卒業式を行うことのできる併設型小学校・中学校の形態のほうが、節目や子どもの成長を実感できる。		
その他ソフト面	制服、運動着、校歌、校章、校旗、電話番号等、中学校を含め、一つの学校として作成。	制服、運動着、校歌、校章、校旗、電話番号等、統合する小学校分で作成。
⇒ 義務教育学校においては、小学校の統合分のみにかかわらず、全て新しくなるため、学校間の調整がより複雑化することや、職員やPTA等部会等の労力の増加が想定される。		